令和 4 年（2022 年）度　産学官・地域連携活動報告書

連携先名称：鹿児島県大島郡喜界町
協定締結日：平成 28 年（2016 年）7 月 28 日
活動状況：継続中
連携先窓口：鹿児島県大島郡喜界町役場喜界町企画観光課 企画調整チーム
活動資金：自治体予算
担当教員(所属)：杉原たまえ（国際農業開発学科）
活動体制（単位）：学科
関連教員(所属)：入江憲治（国際農業開発学科）、豊原秀和（東京農大名誉教授）
活動目的：
喜界島はサトウキビを主軸に、畜産やゴマなどの農業を主産業としている。しかし高齢化に伴い担い手不足や耕作放棄地など多くの課題を抱えている。東京農業大学の指導を頂き、諸問題の解決を図ることを目的にしている。南西諸島は冬季の収入源としてサトウキビを多く栽培しているが、夏場の換金作物の導入が必要である。従って、2022 年度は夏場の換金作物として落花生の導入を試みた。サトウキビの連作障害を回避する意図からも、マメ科作物の導入が必要と考える。さらに夏場の換金作物の導入の必要性がある。これらについて基準ができれば南西諸島の農業発展にも貢献しうると考える。

1. **喜界町の地域活性化のための連携事業**
   喜界島は昭和 43 年ごろから農業拓殖学科（現国際農業開発学科）のファームステーを受け入れており、今後も学生の受け入れによる交流人口の拡大を目指し、地域活性化につなげたい。
2. **喜界島の活性化の構築と文化発展のための連携事業**
   喜界町の基幹産業はサトウキビ生産・和牛・ゴマ生産が主体であるが、サトウキビによる収入は冬場（12 月～３月）であり、夏場の収入が殆どない状況にある。したがって喜界町では夏場の収入源となる作物の選定が急務である。
3. **人材育成のための連携事業**
   一次産業・二次産業・三次産業振興のための研修会を実施する方向で検討していく。

活動内容・成果：

1. 喜界町の地域活性化のための連携事業

・3 年ほどはコロナ禍の影響で学生の来島はなかったが、次年度から国際農業開発学科の春・夏の実習受け入れ、サトウキビ管理、マンゴー栽培、畜産実習などを予定している。

・喜界島では 2020 年に新規畜産業の発展のため、エミューを 8 頭導入し、現在は繁殖に力を入れている。

・過去、喜界島で実習を経験した卒業生が、基幹産業であるサトウキビとゴマを用いた商品を開発し、島の名産品となっている。

2. 喜界島の活性化の構築と文化発展のための連携事業

夏場の収入源の確保のための作物の選定を行った。サトウキビの連作による土壌改良を踏まえつつ、換金性の高い作物として農業支援センターを中心にピーナツを試作し、好結果を得ることができた。喜界町の特産品としてピーナツと黒砂糖を塗した「ガジャ豆」を製品化しているが、ピーナツは島外からの輸入品である。ピーナツを栽培することによって地場産での特産品が可能となる。

【落花生栽培の実証実験】

播種：令和 4 年 5 月 30 日（月）

定植：令和 4 年 6 月 21 日（火）

土寄せ：令和 4 年 7 月 22 日（金）ＮＫ80/10ｋｇ

収穫：令和 4 年 12 月 21 日（水）

管理：夏場の水かけと雑草処理

収穫後の管理：収穫後、ハウス内に 1 週間ほど天日干しにした。

【成果】

・夏場に台風が近くを通過したが、塩害の影響も無かった。

・定期的な水かけと雑草処理だけなので管理に係る労力も易く思えた。

・収穫は、鍬で掘り起こし人力で実を収穫したため時間と労力がかかった。

・収穫後に乾燥させる場所の確保が必要。

（雨にぬれないよう管理すること、カラスの被害にあわない場所）

3. 人材育成のための連携事業

これまで生産者・加工業者・流通といった横の連携がされていなかったため、産業育成も停滞していた。次年度に向けては、6 次産業化を目指した取り組み

を行う必要がある。そのことによって、担い手の育成や起業家としての人材の確保が可能となるような仕組みを作ることが急務と考える。コロナ禍により、予定していた研修会の開催はできなかった。

課題・改善点：

3 課題のうち、2 課題（第 1・第 2 課題）がコロナ禍により実施することができなかった。第 2 課題の喜界島産のピーナッツ生産については、生産自体は、労働集約的な管理が必要ではないため問題はないが、収穫および収穫後の管理に関して、労働力の調達や生産物保管場所の確保、カラス対策が課題として挙がった。

発芽状況

生育状況

収穫